ダブルブラインド方式の査読をめぐって

Working double-blind

Nature Vol. 451 (605) / 7 February 2008

著者を匿名にする必要はあるのか？

著者と査読者の両方を匿名とするダブルブラインド方式の査読は、非常によいものだと思われているようだが、あまり実践されていない。出版研究コンソーシアム（Publishing Research Consortium：PRC）は、自然科学、社会科学、人文科学にわたる3000人の研究者を対象とした国際調査により、査読についてどのように考えているかを評価した。1月に発表された調査結果[1]は、査読の価値を強く肯定するものとなった。また、71パーセントの人がダブルブラインド方式による査読を信頼しており、56パーセントの人が他の査読方式よりもこの方式を好ましいと思っていることも明らかになった。ダブルブラインド方式を最も支持しているのは、この方式の経験者（人文科学と社会科学）と、この方式による利益が大きいと考えられている人々（女性著者）であった。最も消極的なのは編集者であった。編集者、特に*Nature*の編集者は、自らの姿勢を再考すべき時期にきているのだろうか？

著者の氏名が査読者に知らされる場合、著者本人や以前の研究についての先入観や、著者の性別、国籍、当該研究分野に参入してから日が浅いことなどへの偏見により、著者が不利益を被る可能性がある。しかし、PRCによる調査結果は、「査読者が著者の氏名を知ることで、適切な質問をすることが可能になる（例えば、複雑な技術的説明と実験技術の低さを区別することが可能になる）」という*Nature*らの所信を裏づけている。査読者が著者の氏名を知ることには、著者がこれまでに発表してきた論文と新しい論文を比較し、その報告に新規性があることを保証するのを容易にするという利点もある。さらに、著者の氏名を憶測ではなく確実に知ることで、査読者は編集者に潜在的な利害対立を申し出やすくなる。

ダブルブラインド方式による査読のほうがすぐれているという証拠はあるのだろうか？　ダブルブラインド方式を採用することにより、編集者や著者が建設的だと思えるコメントが増えたり、著者が本当の意味で保護されたり、偏見が少なくなったりするのなら、この方式はすぐれているといえるだろう。これまでのところ、まだ結論は出ていない。少なくとも、生物医学文献での1つの研究では、ダブルブラインド方式による査読がレビューの質を向上させるという結果が得られたが、7誌の医学専門誌でのより大規模な研究[2-3]では、査読者と著者の両方が匿名にされた場合にも、著者も編集者も、コメントの質にこれといった違いを感じていなかった。査読者は、約40パーセントの論文について、その著者を少なくとも1人は特定することができた。これは、ダブルブラインド方式の存在理由に疑問を投げかける事態である。*Public Library of Science*の編集者は、ダブルブラインド方式による査読を要請する人が非常に少ないうえ、著者の氏名があまりにも容易にわかってしまうため、この方式を廃止してしまった。

ダブルブラインドによる査読の1つの利点は、女性のファーストネームをもつ著者に対する偏見が明らかに減少することである（このことは、参考文献4をはじめとする多くの研究で立証されている）。この結果は、旧弊な学術誌に論文を投稿する著者は、実際に発表される最終版のみにファーストネームを入れるべきであることを示唆している。

ダブルブラインド方式は、正式に発表される前の論文は秘密にするべきであるという文化に根ざしている。生命科学の分野では、ほぼそのようになっている。しかし、高エネルギー物理学をはじめとする一部の物理科学分野では、arXivというオンラインリポジトリを通じてプレプリントが広く共有されている。このように、ダブルブラインド方式による査読は、学問の世界をよりよいものにしようとするもう1つの勢力である「情報の開示」と

©2008 NPG Nature Asia-Pacific

対立している。PRC による調査では、競争の激しい分野（神経科学など）や商品化や応用への関心が高い分野（材料科学や化学工学など）ではダブルブラインド方式への支持が高いのに対して、情報開示の伝統がある分野（天文学や数学など）では、明らかに支持が少ないことがわかった。

結局、学術誌はどうすればよいのだろうか？　編集者は、中立の立場で査読者と著者の間の橋渡しをする責任を負っているのだから、ときには偏見から著者を保護する役に立つこともあるだろう。いうのは簡単だが、実践するのはむずかしい！　PRC による調査は、編集者の公平性がほとんど信頼されていないことを示唆している。けれども編集者たちは（少なくとも *Nature* とその姉妹誌の編集者は）、確かにその責任を重く受けとめている。

Nature の編集方針は、長期的には透明性を高める方向に進んできている。こうした動きを、ダブルブラインド方式の有益さを裏づける証拠がないという事実と考え合わせると、近い将来、本誌がダブルブラインド方式による査読をデフォルトとするようになることはないと思われる。しかし、本誌の読者の多くは、論文の著者であるだけでなく査読者でもある。我々は、著者の匿名性に関する両方の視点からの意見を歓迎する。そのために、この論説を http://blogs.nature.com/peer-topeer/2008/02/working_doubleblind.html に掲載し、コメントを募集することにした。 ■

1. Publishing Research Consortium *Peer Review in Scholarly Journals* (Mark Ware Consulting, Bristol, 2008); available at http://www.publishingresearch.net/PeerReview.htm
2. Justice, A. C. *et al. J. Am. Med. Assoc.* **280**, 240.242 (1998).
3. Cho, M. K. *et al. J. Am. Med. Assoc.* **280**, 243.245 (1998).
4. Budden, A. E. *et al. Trends Ecol. Evol.* **23**, 4.6 (2008).

©2008 NPG Nature Asia-Pacific